

どちらがたやすいのか？—マルコ福音書 2 章 9 節の研究—

Which is Easier to Say? A Study on Mk 2.9

小西 哲郎

KONISHI Tetsuro

ABSTRACT ⁽¹⁾

The purpose of this article is to make a critical study of Mk 2.9. In this verse Jesus asks the scribes which is easier to say to the paralytic, “Your sins are forgiven,” or “Rise...and walk.” Despite the apparent simplicity of the choice, the correct answer is still disputed among exegetes. The main reason why they are divided is the complexity of the Greek text. The first part of this paper takes a close look at the order of biblical articles and textual composition, examines the editorial policy of Mark, and affirms that the aim of Mk 2.1-12 is to criticize the scribes, that is, Jewish tradition. The second part discusses the relation between forgiveness of sins and curing of diseases. A survey of a number of studies on this issue reveals that, though the author accepted the close relationship between sins and diseases, his main concern was the reality of paralytic, not legal or theological uprightness. The last part investigates the Markan usage of alternatives. It finds that, of two possible answers, Mark always places the right one first. Therefore, it seems reasonable to conclude that his expected answer to Jesus’ question is the former: “Your sins are forgiven.”

I 問題設定

マルコ福音書 2 章 1～12 節は、治癒奇跡の話（1～5a 及び 11～12 節）の間に律法学者との論争部分（5b～10 節）が挿まれ、全体として一つの物語に仕上がっている。屋根が剥がされ、その穴から中風患者が釣り降ろされて来たのを見て、イエスが「子よ、あなたの罪は赦される」と言う。それに対して律法学者たちが、「誰が罪を赦すことができるのか、唯一なる神の他に？」と心の中で論じる。それを見抜いたイエスが「どちらがたやすいのか、その中風の者に『あなたの罪は赦される』と言うことか、それとも『起きよ、あなたの床を取り上げ、歩け』と言うことか？」と彼らに問う（9 節）。物語の叙述の仕方から見て、この問は明らかに修辞疑問である。つまりこれはイエス自身が疑問に思っていることを律法学者たちに尋ねているのではなく、自明であるべき事柄を律法学者たちに突きつけることによって、彼らの「頭の硬さ」を批判しているように描かれているのである。し

かしこの問に対する答は言明されていない。そこでその答の判断を巡って様々な解釈がなされてきた。ではこの福音書の著者マルコが想定していた答は一体どちらなのだろうか？

Ⅱ マルコ福音書 1 章 1 節～ 3 章 6 節の構成

言葉の意味はその前後の文脈から推察される。聖書記事の意味を知る際にも、福音書全体の構成におけるその記事の並べ方を知ることが重要な手掛りとなる。ここではマルコ福音書の最初部分の構成を概観して、2 章 1～12 節の性格を観察する。

(1) 構成

1 章 1 節	表題	
2～11節	洗礼者ヨハネ	
(9～11節)	イエスの受洗	
12～13節	荒野での試み	
14～15節	ガリラヤでの宣教開始	
16～20節	漁師を弟子にする	
21～28節	悪霊に憑かれた人を癒す	奇跡 1
29～31節	シモンの姑を癒す	奇跡 2
32～34節	夕べの癒し	
35～39節	イエスの祈りと巡回伝道	
40～45節	らい病人を癒す	奇跡 3
<u>2 章 1～12節</u>	<u>中風の人を癒す</u>	奇跡 4
13～17節	レビの召命と食事	
18～22節	断食問答と新しい酒	
23～28節	安息日問答	
3 章 1～6 節	安息日の癒し	奇跡 5

奇跡 1
奇跡 2

奇跡 3
奇跡 4

第一奇跡物語集

論争 1
論争 2
論争 3
論争 4
論争 5

第一論争物語集

(2) 分析

1 章 2 節以後洗礼者ヨハネの話が続き、その中でイエスの受洗が描かれている。12～13 節までは福音書全体の序曲であり、それより後にイエスの公的生涯が叙述されている。続いてガリラヤで活動を開始し、最初の弟子たちを召命する記事が置かれている。その後に四つの奇跡物語が並べられており（1 章21節～ 2 章12節）、それが第一の奇跡物語集を形成している。⁽²⁾ この第一奇跡物語集に編集された奇跡の記事は、すべて治癒及び悪霊追

放の奇跡である。また 2 章 5 b～10 節の論争の記事はマルコ福音書で最初の論争物語であり、これを含めてこのあと 3 章 6 節までに五つの論争物語が続いている。この一連がマルコの二大論争物語集の一つである。⁽³⁾

本論の冒頭にも述べた通り、2 章 1～12 節は奇跡物語の間に論争物語（5 b～10 節）が挿まれた形になっており、奇跡物語と論争物語との両者の性格を兼ね備えている。それによりこの物語は第一奇跡物語集と第一論争物語集との掛け橋の役割を果たしていると言える。つまり福音書全体の構成の中でこの記事はうまく編集されているということである（下図参照）。⁽⁴⁾

1～4 節	状況設定	奇跡
5 節	中風の人への罪の赦しの宣言	奇跡
6～7 節	律法学者が心の中で論じる	論争
8～10 節	イエスによる反論	論争
11 節	中風の人に対する命令	奇跡
12 節	物語の結末	奇跡

Ⅲ 2 章 1～12 節の構成とポイント

次に問題の 2 章 9 節が含まれる 2 章 1～12 節を詳しく見てみる。

(1) テキスト

- 1 節 Καὶ εἰσελθὼν πάλιν εἰς Καφαρναοὺμ δι' ἡμερῶν ἠκούσθη ὅτι ἐν οἴκῳ ἐστίν.
2 節 καὶ συνήχθησαν πολλοὶ ὥστε μηκέτι χωρεῖν μηδὲ τὰ πρὸς τὴν θύραν,
καὶ ἐλάλει αὐτοῖς τὸν λόγον.
3 節 καὶ ἔρχονται φέροντες πρὸς αὐτὸν παραλυτικὸν αἰρόμενον ὑπὸ τεσσάρων.
4 節 καὶ μὴ δυνάμενοι προσενέγκαι αὐτῷ διὰ τὸν ὄχλον ἀπεστέγασαν τὴν στέγην
ὅπου ἦν, καὶ ἐξορύξαντες χαλῶσι τὸν κράβαττον ὅπου ὁ παραλυτικὸς κατέκειτο.
5 節 καὶ ἰδὼν ὁ Ἰησοῦς τὴν πίστιν αὐτῶν λέγει τῷ παραλυτικῷ,
Τέκνον, ἀφίενταί σου αἱ ἁμαρτίαι.
6 節 ἦσαν δέ τινες τῶν γραμματέων ἐκεῖ καθήμενοι
καὶ διαλογιζόμενοι ἐν ταῖς καρδίαις αὐτῶν,

- 7 節 Τί οὗτος οὕτως λαλεῖ; βλασφημῇ τίς δύναται ἀφίεναι ἁμαρτίας εἰ μὴ εἷς ὁ θεός;
8 節 καὶ εὐθὺς ἐπιγνοὺς ὁ Ἰησοῦς τῷ πνεύματι αὐτοῦ ὅτι οὕτως διαλογίζονται
ἐν ἑαυτοῖς λέγει αὐτοῖς, Τί ταῦτα διαλογίζεσθε ἐν ταῖς καρδίαις ὑμῶν;
9 節 τί ἐστὶν εὐκοπώτερον, εἰπεῖν τῷ παραλυτικῷ, Ἀφίενταί σου αἱ ἁμαρτίαι,
ἢ εἰπεῖν, Ἐγείρε καὶ ἄρον τὸν κράβαττόν σου καὶ περιπάτει;
10 節 ἵνα δὲ εἰδῇτε ὅτι ἐξουσίαν ἔχει ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ἀφίεναι ἁμαρτίας
ἐπὶ τῆς γῆς λέγει τῷ παραλυτικῷ,
11 節 Σοὶ λέγω, Ἐγείρε ἄρον τὸν κράβαττόν σου καὶ ὑπάγε εἰς τὸν οἶκόν σου.
12 節 καὶ ἠγέρθη καὶ εὐθὺς ἄρας τὸν κράβαττον ἐξῆλθεν ἔμπροσθεν πάντων, ὥστε
ἐξίστασθαι πάντας καὶ δοξάζειν τὸν θεὸν λέγοντας ὅτι Οὕτως οὐδέποτε εἶδομεν.

(2) 試訳

- 1 節 そして数日後、彼が再びカファルナウムに入ると、
彼が家にいるということが聞かれた。
2 節 そして多くの者たちが集められたので、戸まで隙間がなくなるほどだった。
そして彼は彼らに御言葉を語っていた。
3 節 そして彼のところへ四人が中風の人を担いで、運びながら入って来る。
4 節 そして群集のために彼に運んで行くことができなかったのも、彼らは彼がいた辺り
の屋根を剥がし穴をあけ、中風の人が寝ている床を吊り降ろす。
5 節 そしてイエスは彼らの信を見て、その中風の人に言う、
「子よ、あなたの罪は赦される。」
6 節 さて数人の律法学者たちがそこに座っており、
彼らの心において思い巡らしていた。
7 節 「なぜこの人はこのように語るのか？神を汚している。
誰が罪を赦すことができるのか、唯一なる神の他に？」
8 節 そしてイエスは、彼らが彼ら自身においてこのように思い巡らしているのを、
彼の霊によって直ちに知り、彼らに言う、
「なぜあなたがたはあなたがたの心においてこのように思い巡らしているのか？」
9 節 どちらがたやすいのか、その中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うことか、
それとも『起きよ、あなたの床を取り上げ、歩け』と言うことか？
10 節 しかし地の上で人の子が罪を赦す権威を持っているということを、
あなたがたが分かるために」と言って、彼はその中風の人に言う、

11節 「あなたに私は言う、起きよ、あなたの床を取り上げ、あなたの家に帰れ。」

12節 そして彼は起き上がり、直ちに床を取り上げて皆の前を出て行った。

そして皆は驚いて、このようなことをわれわれは今まで見たことがない、
と言って神を賛美した。

(3) 写本上の問題

5、9 節の ἀφέωται (赦される) が完了形 (ἀφέωται) になっている写本群がある⁽⁵⁾。これはルカの並行箇所 (5 章20節) の読みが入り込んだものであろうか (Metzger)。⁽⁶⁾ いずれにせよ、ややぎこちない現在形の文を後の写本家が文章をなめらかにするために完了形に訂正したのではないか、という推量は妥当であると考えられる (田川)。⁽⁷⁾ なおこの意味の違いが本論で取り上げる 9 節の解釈に影響を与えることはない。

(4) 編集

ではこの2章1～12節内部の編集を観察してみる。この箇所は元来、純粹に奇跡物語であったものが、論争物語部分 (5 b～10節) が挿入された結果、論争物語としての性格を持つようになったという仮説を W. Wrede が 1904 年に提唱して以来、多くの学者たち (E. Klostermann, R. Bultmann, E. Lohmeyer, E. Haenchen, et al.) がこの説を支持してきた。⁽⁸⁾ この説は、この論争物語部分の違和感・つながりの悪さ (例えば 5 節 b でイエスが罪の赦しを口にする必要性はない等) をよく説明している。しかし 9 節のイエスの発言中には、5 節 b の罪の赦しの言葉 (ἀφίενταί σου αἱ ἁμαρτίαι) と 11 節の病気の癒しの言葉 (ἔγειρε ἄρον τὸν κράββατὸν σου) との両方が使われているので、われわれとしては Guelich に従って 5 b～10 節を独立した資料とは考えない。⁽⁹⁾

また接続詞 δὲ によって 9 節に反接する 10 節については「イエスが今や実行しようとしてつつある癒しの奇跡が『より易しい』ことなのか、それとも『より難しい』ことなのか、一読しただけでははっきりしない。さらに表現を変えれば、今やイエスは『より易しい』ことをも為し得ることをもって『より難しい』ことを為す権威を証明しようとしているのか、あるいは、その逆なのか不明」であるという点が指摘されている (大貫)。⁽¹⁰⁾

(5) 物語の主眼点

律法学者が 7 節で正しく指摘しているように、旧約聖書においては、罪の赦しは神のみが行うことのできる大権であるとされている。⁽¹¹⁾ マルコは罪を赦す権威を持つイエスを描いているが、その叙述はイエス＝神というキリスト論的弁明ではなく、むしろ罪の赦し

を巡る律法学者たち（＝伝統的ユダヤ教）への批判と呼んだほうがふさわしい。つまりこの物語の動機は奇跡物語的というよりも論争物語的であるということである。福音書の構成も、この物語を境に論点が癒しの奇跡から論争へと移っている（Ⅱを参照）。またこの物語を含めて以下に続く論争物語は一貫してユダヤ教における罪の問題を扱っている。そのようにテーマに連続性があることから、奇跡物語の枠に置かれてはいるが、この物語の主眼は論争にあると考えられるのである。逆に奇跡物語の状況を与えられることにより、論争物語としての側面がより具体的でインパクトを持つものになっている、ということもできるだろう。

Ⅳ 罪の赦しと病気の癒し

2章1～12節は病気の癒しをテーマとする奇跡物語を基盤としつつも、罪の赦しを巡る論争物語としての性格を強く出していることはⅡ、Ⅲで明らかになった。このペリコーペではその病気の癒しと罪の赦しとの関連が前提とされている。それは中風の人を見たイエス自身が「あなたの罪は赦される」と唐突に言い、またそれについての説明的な文章が付加されてはいないからである。発達した医療技術と衛生観念を持っている現代人には奇異に映るこのような治癒奇跡と罪の赦しとの因果応報関係を、先行研究を検討しながらこの章では考察する。（なおこの章では便宜上、赦罪にA、治癒にBの記号を付す。）

(1) 赦しの不可能性

7節でテキスト自身が述べている通り、罪の赦しは唯一なる神のみが為せる業とされていた。神のみに可能ということは、人間には不可能ということに他ならない。つまり、病気の癒しがいかに超人的・奇跡的なしるしであったとしても、その難易度は罪の赦しに勝るものではない。この難易度の大小を図式的に表せば、罪の赦し（A）＞病気の癒し（B）ということになる。これに従えばイエスが実演したのはより難易度の低い方だったことになる。Lohmeyerはこれをユダヤ教の聖書解釈に用いられる論理の一つ「小から大へ」（a minore ad majus）として説明している。つまり小さいこと（病気の癒し＝B）ができるのは、そのもとにある大きいこと（罪の赦し＝A）ができる証拠である、という論理である。⁽¹²⁾ 10節のイエスの発言の流れで、より易しいことの実演として癒しの業が為されたということとを良く説明してはいるが、9節のイエスの質問と彼の行為との関係が必ずしも明らかでないところがこの説明の難点である。Laneは「（2章9節で）反問することにより、イエスは彼らの安易な仮定（2章7節）に挑戦する。…それはまたその患者の経験において、実際に赦しが実現したということを実証する癒しの言葉を準備するのである。その二つの

うち、赦しの宣言（A）がより大切、かつより困難なのである」と述べている。⁽¹³⁾ ここでは 7 節の律法学者たちの心の眩きへの応答として 9 節のイエスの発言が理解されているが、ではその後でなぜイエスが癒しの業を実践したのかという点の説明は十分ではない。

Schweizer, E.は「小から大へ」の論理をここに認めて「マルコにとっては罪の赦し（A）がより大きなこと、より困難なことである。癒しの業（B）は、遙かにより深いところまで及ぶ彼の罪をゆるす権威（A）に対する徴である」としながらも、「しかし敵対者（律法学者）たちは、本当に罪がゆるされたという証拠を提示することなく、ただ口先でそんなことを言うのは容易であると考えた」とより詳しい考察を行っている。⁽¹⁴⁾ 彼の指摘の重要な点は、「口先だけで言うこと」を赦しの行為及びその不可能性・絶対性と切り離して考えているところである。

(2) 赦しの不可知性

そこで赦しの不可能性に加えて、われわれは赦しの不可知性をも考慮しなければならない。この認識を重視する学者たちは、概ね罪の赦しを口にする方が病気の癒しの奇跡よりも易しいと考えている。それは病気を癒すことが誰にでもできるわけではないのに対して、罪の赦し（もっともそれは病気が癒されることによって本当であると証明されるのである）を口にするだけなら、誰にでもできることだからである。これを図式的に表すと、罪の赦し（A）＜病気の癒し（B）ということになる。それゆえここではイエスが本当に罪の赦しを為すことができるかどうかの証明が問題となっている。例えばDummelowは「もちろん前者（A）がたやすい。どんなペテン師でも『あなたの罪は赦される』と言うこと（A）ができる。なぜならその言葉に効力があったのかどうか、人はそれを知ることが出来ないからである。しかし『起き上がり歩け』と言うこと（B）はたやすすくない。なぜならもしそれらの言葉が権威を伴わずに語られたならば、直ちにそれがペテンだと分るからである」と述べている。⁽¹⁵⁾

(3) 実証の不可能性

また実証の不可能性という観点から、ここを理解する学者たちも多数存在する。彼らもまた罪の赦しをただ口にするだけの方が病気の癒しを実演することよりも易しいと考えている点では（2）と同様である。ここでも罪の赦し（証明なし）（A）＜病気の癒し（証明あり）（B）ということになる。例えばBarclay「どんな山師でも『あなたの罪は赦される』と言うこと（A）ができた。彼の言葉に効力があったのか、なかったのか、それを証明することはできなかった。そのような発言は全く確かめようがなかったのである。しかし

『起き上がり歩け』ということ（B）はその効力の有無がその時その場で証明される事柄なのである。…彼は癒された（B）。ゆえに彼は赦された（A）のである」⁽¹⁶⁾、den Heyer「自ずから『あなたの罪は赦される』と『言う』ほう（A）がより容易である。それは検証できないからである。しかしながら、もう一方の問題（B）はそれができよう。」⁽¹⁷⁾、川島「結果がすぐにわかる治癒の言葉を語る（B）よりも、検証不可能な赦罪宣言（A）のほうがやさしいかもしれない」⁽¹⁸⁾ という具合である。

Guelichはここには「大から小へ」という論理が働いていると見る。「この文脈は、実証可能かどうか易しいまたは難しいの度合いの決め手になる。観察することによって癒しの言葉（B）は確かめることができるが、赦しの言葉（A）は経験によって確かめることができないのである。だから観察によって確かめられる癒しの言葉（B）（より難しい）は、より大（より難）からより小（より易）へという論理によって赦しの言葉（A）（よりたやすい）の正当性を含むであろう」と述べている。⁽¹⁹⁾ 黒崎も同様に「勿論前者（A）が易い、其故は後者（B）はその結果が人の目に見え前者（A）は見えないからである。夫故に若しイエスが後者（B）の如き命令を発して、中風の人が之に従ふならば、此のイエスは勿論罪を赦す権がある事を認めなければならぬ」と述べている。⁽²⁰⁾ これらは9節の問の帰結としてイエスの実演を理解したものであるが、10節の *et*（しかし）の意味が不鮮明になる。

（4）論理的関係

ではそもそも罪の赦しと奇跡行為との論理的関係はどうなっているのか？

高柳は治癒の奇跡は罪の赦しの権威の裏付けであるとしている。「治癒（B）の実証によって赦罪宣言（A）をうらづけ、いやし（B）が罪の赦し（A）のしるしであることを示された。」⁽²¹⁾ 川島も同様に、「奇跡（B）は罪を赦す（A）人の子イエスの権威を証明する役割を果たす。換言すれば、その権威はたんに罪の赦しを宣言する（A）よりも困難であると思われる奇跡の行為（B）によって裏打ちされることになる」と述べている。⁽²²⁾ 佐藤はそれらを奇跡行為の罪の赦しに対する包括性という言葉で表現している。「（B）の命令が実行されれば病が癒されたことになり、したがってその病の原因の罪も赦されたことになる。（B）はことがらの（A）を内包する。」⁽²³⁾

そうではなく、それらを同一であると捉えるのはGouldである。「イエスはここで癒しと赦しとを対比させているのではなく、「赦される」ということと「癒される」ということとを対比しているのである。この二つは一致しており、それゆえその違いはただ同じことの二つの言い方の違いでしかないであろう。人の罪の結果が病であるなら、癒しは罰の赦

しである。」⁽²⁴⁾ 彼がここでSchweizerと同様に行為と言葉との区別に着目している点は注目に値する。

それらに対してWilliamsonはそれぞれは本来別々のことがらであるとしている。「人は癒されて赦されないことも、赦されて癒されないこともできる。しかしこの場合には、この2つはイエスによって一緒に扱われている。」⁽²⁵⁾

(5) 心身の相関関係

Mannは中風の心身相関的關係（ここでは「心の救い＝罪の赦し」と「肉体の癒し」との関係である）から、イエスの罪の赦しの発言に単なる証明以上の機能、すなわち癒しの意図をも見ている。「イエスの質問は、癒しの目に見える徴によって、罪の赦しの宣言が真実であることを証明するために発せられたのである。…イエスが中風の患者が心身相関の特徴を持つことを知っており、赦しの宣言はまた癒しの宣言をも意図していたとすることは可能である。」⁽²⁶⁾

(6) 語りかけられる側の視点

大貫は難易度の測定地点として語りかけられる側の視点を導入している。「その難易を測る規準は、語り手のイエスにとってということではなく、むしろ、語りかけられる中風患者にとってということであつただろうと推測される。中風患者にとっては、『罪』の赦しの宣言（A）を聞く方が、床を取り上げて歩くより『より易しい』ことだというのである。…『人の子』イエスは中風患者にとって『より難しい』こと、つまり床を取り上げて歩くこと（B）を実現させることによって『より易しい』こと、つまり『罪』の赦し（A）をも実行するのである。」⁽²⁷⁾

(7) まとめ

以上の論考をふまえて、2章1～12節を記すに当たって福音書の著者マルコが、罪の赦しと病気の癒しとをどのように見ていたのかをまとめる。

まず5節の発言から、マルコが病気の原因と罪とを因果関係で考えていたことはほぼ間違いないと思われる。しかしそれは彼が罪の赦しを癒しに優先させていたということを意味しない。それはマルコの描くイエスが罪の赦しとは関係なしに、1章ですでに数多くの治癒奇跡を行っているからである。つまりイエスによる罪の赦しの権威はマルコにとって自明のことなのである。⁽²⁸⁾ マルコにとっては罪の赦しに言及することなくして成立する「癒しの現実」こそが重要なのであり、罪の赦しは二次的なもの、付け足しにすぎないの

である。

以上の考察より、ここでのマルコの前提は、罪の赦しに先行する病気の癒しであると言えよう。それは病気の癒しと罪の赦しとを関連付けているのは、福音書の数ある物語のうちこの記事とその並行記事（マタイ福音書9章1～8節、ルカ福音書5章17～26節）のみ、という事実もマルコが罪の赦しをさほど重要視してはいないということを示している。

であるとすれば、5節で中風の患者に対して、なぜイエスがまず罪の赦しを宣言しているのかという問を説明する必要がある。しかしこの点はこの物語がマルコ福音書に記された最初の論争物語であるということで説明できる。つまり1章では治癒に際して全く問題にならなかった罪の問題がここで初めて導入されているのであり、それは律法学者たち（＝伝統的ユダヤ教）との論争がモチーフとなっていると見るべきである（この物語の核心が論争にあることは、われわれはすでにⅢで確認した）。

さらに9節のイエスの疑問については、これが①律法学者たちの内心の眩き（7節）に対して発せられている修辞疑問であり、②どちらを「言うこと」がたやすいのか（εἰπεῖν ……; ἢ εἰπεῖν）を問うている、という二点を指摘することができよう。そもそもイエスがこの癒しの行為を实践するきっかけとなったのは律法学者たちの「内心の眩き」である。彼らのイエス批判の言葉は決して実際に口から出たのではなく、心の中での声無き眩きである、という事実は重要である。つまり「罪の赦し」をイエスに口にさせることによって、マルコは敵対者を場面に登場させているのである。言い換えれば、イエスによる「罪の赦し」発言は論敵に対する挑戦のきっかけを提供するものなのである。つまりこの論争はイエスの方から挑んでいるといえる。そして病人を目の前にしながら、その病人の現実ではなく、罪の問題（その観念的な意味付け）にしか眼中にない律法学者を批判しているのである。

V マルコにおける他の二者択一形式の質問

2章9節と同様の二者択一の質問形式は、マルコ福音書で他に3回採用されている（3章4節、11章30節、12章14節）。これら4回のすべてが上述の二大論争物語集に含まれている。またそのいずれもが単純な質問ではない。例えば2章9節と3章4節とは修辞疑問、11章30節は反問、12章14節は策略的質問とでも言うべきものである。①未知の事柄を相手に問う類のものではない質問としてそれぞれが描かれており、②またそれに対するストレートな答が言明されていない、という二点でそれらは共通している。ここではマルコの他の同様の質問を概観することにより、マルコのレトリック上の癖を明らかにする。（なおこの章では便宜上、最初の選択肢をA、もう一つの選択肢をBと置くことにする。）

(1) 3章4節

2章9節と共に第一の論争物語集にふくまれている3章4節は、また治癒奇跡を巡っての論争というスタイルも2章1～12節と同じである。イエスを訴えるために、安息日に会堂で片手の萎えた人を彼が癒すかどうかを見ようとしていた人々に対して、イエスは「どちらが安息日にして良いことか？善を行うことか（A）それとも悪を行うことか（B）、命を救うことか（A'）それとも殺すことか（B'）？」と尋ねる（3章4節）。この問いに答えるものはいない。またイエスが答を言明するわけでもない。イエスは怒り、また人々の心が頑ななのを嘆きながら、ただその人に「手を伸ばしなさい」言う。するとその手がまっすぐに、元どおりになった、という物語である。

ここでは「安息日に萎えた手を癒して良いか」という具体的なケースを巡る法律問題が一般化された結果、「善を行うことか（A）悪を行うことか（B）」また「命を救うことか（A'）殺すことか（B'）」という抽象的・倫理的問題に置き換えられている。この個所もファリサイ派の人たちを論敵とする論争物語であるが（6節）、当時のファリサイ派においても、「生命の危険は安息日の戒めに優先する」と考えられていた。⁽²⁹⁾ 文脈からイエスがここで実演したのは「安息日にして良いこと＝正答」の方であるとしか考えられないので、彼が行った「手を癒すこと」≡「命を救うこと（A'）」≡「善を行うこと（A）」という正解が想定される。

(2) 11章30節

11章27～33節は第二の論争物語集の最初に位置する。祭司長・律法学者・長老たちがイエスのところへ来て「何の権威によってこれらをするのか？だれがそうする権威をあなたに与えたのか？」と問う。彼はこの問にストレートに答えることはしない。逆に「ヨハネの洗礼は天からのものであったか？（A）、それとも人からであったか？（B）」と彼らに問い返して、もしあなたがたが自分の質問に答えるなら、自分もあなたがたの質問に答えようという交換条件をつける（11章30節）。そして彼らが自分の質問に答えられないのを見て、自分も彼らの質問に対する答を言わないと言って彼らの最初の質問をはぐらかす。ここでもイエスの質問に対する答は言明されていない。しかし答は言明されていないものの、祭司長・律法学者・長老たちが（B）を選択できない事情が11章34節で説明されている。それは彼らが「群衆を恐れて」（ἐφοβοῦντο τὸν ὄχλον）いたゆえであり、それは「皆」（ἅπαντες）洗礼者ヨハネを預言者だと「本当に」（ὄντως）思っていたからである。群衆が皆、本当に信じていたのだ、ということがここで強調して表現されている点に留意すべきである。マルコの描く「群衆」（ὁ ὄχλος）はイエスに好意的である。⁽³⁰⁾ それゆえマルコ

がこのように群衆を描く時には、その群衆の見解は肯定的に扱われるべきであると考えられる。ということは、マルコはここで (B) の答の可能性を否定することにより、洗礼者ヨハネ＝預言者という図式を暗黙のうちに仄めかしていると言える。これにより「ヨハネの洗礼は天から」(A) という答が、ここでマルコが用意した答であると考えられるのである。

(3) 12章14節

12章の二者択一形式の質問では、ファリサイ派・ヘロデ派の数名がイエスのところへ来てその言葉尻を捕らえようとして「皇帝に税金を払ってよいか？ (A) それともよくないか？ (B) (Καίσαρι ἢ οὐ)」、払うべきか (A') 払うべきでないか (B')」と尋ねる (12章14節)。ここでは質問を発したのがイエスではなく、その敵対者であるところが他の三箇所と異なっている。この問に対してもイエスはストレートに答えず、まずデナリオン硬貨を持ってこさせて彼らに「これは誰の像か？」と聞く。そして彼らに「皇帝のものである」と先に答えさせた上で、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」と答える。この問答ではファリサイ派たちの策略に対して、彼は逆に彼らに質問して「皇帝のもの」という言葉を先に言わせている。それによってファリサイ派たちの「合法か違法か」という法解釈の問題を、皇帝の税金と神殿税との区別、つまり納税に用いる貨幣の種類の問題へと変換している。そのようにしてイエスは質問の内容を巧みに変えて論敵をはぐらかす。そして相手の土俵で戦わずに（それでは相手の術中に陥ることになるから）、議論を自分の手の内に持ってきた上で、微妙な答をするのである。ここでのイエスの答えが、もはや最初の論敵の問に対する答になってはいない点に注意されたい。しかし、にもかかわらず、イエスは黙って答えなかったわけではない。「皇帝に」(Καίσαρι) と答えているのである。そしてこの答はまさにファリサイ派たちの最初の選択肢 (A) なのである。イエスは論敵に応えたが答えなかった。彼が与えたのは実は別の質問に対する答であったのである。

(4) まとめ

このように見てくると、マルコ福音書における二者択一形式の質問の他の三個所では、すべて最初の選択肢 (A) が「正解」として想定されていると結論付けることができる。

VI 結論：「言うは易く行ふは難し」⁽³¹⁾

以上の考察をまとめると、われわれは以下のように言うことができる。

まず 2 章 1～12 節におけるマルコの動機は奇跡よりも論争にある。それは福音書の構

成・物語の叙述の仕方から明らかである。そしてこの論争はイエスの方から挑んでいる。その論敵は律法学者＝伝統的ユダヤ教であり、病人が苦しんでいる現実を見ようとしない非現実的・非人間的な有り様を批判しているのである。マルコにとっては人間の病気が現実には癒されること（B）にこそ意味があるので、罪の赦し（A）は二の次である。従ってもし病気の癒し（B）が伴わない罪の赦し（A）なるものが存在したとしても、それは彼には意味がない。そしてマルコにとっては病気の癒し（B）なくして口先で罪の赦し（A）を語るナンセンスさは、病人を前にしても罪の問題しか心に思い浮かばない律法学者たちのナンセンスさと同じなのである。つまり罪の赦し（A）を口先だけで宣言することより、実体を伴う病気の癒し（B）を命令する方がより価値がある、とマルコは考えていたと結論づけられる。言い換えればこれは「罪の赦しを言うこと（ἐπιεῖν）」（A）と「起き上がって歩けと言うこと（ἐπιεῖν）」（B）との重要性・重大性の比較である。マルコにとってより重大なのは（B）であり、従ってより軽微、よりたやすいのは（A）の方である、と言える。二者択一形式の質問におけるマルコのレトリック上の癖も、その結論を補強するであろう。

注

- (1) Prof. Tom Bradley is to be thanked for his reviewing this abstract.
- (2) 第二の奇跡物語集は4章35節～5章43節である。
- (3) もう一つの論争物語集は、11章27節～12章34節である。
- (4) これに関しては、田川建三『マルコ福音書 上巻』（現代新約注解全書）、新教出版社、1972年に詳しい。
- (5) 5節：papyrus #88, codex Sinaiticus, codex Vaticanus, codex Ephraemi et. al.
9節：codex Alexandrinus, codex Ephraemi, codex Bezae et. al.
- (6) Metzger, B. M., A Textual Commentary on the Greek New Testament, Stuttgart, 1971, 1994.
- (7) 田川、前掲書、129頁。
- (8) 田川、前掲書、131頁。
- (9) Guelich, R. A., Mark 1-8:26 (Word Biblical Commentary), Dallas, 1989, p. 88.
- (10) 大貫隆、『マルコによる福音書Ⅰ』（リーフ・バイブル・コンメンタリーシリーズ）日本キリスト教団出版局、1993年、102頁。
- (11) 出エジプト記34章6～7節、詩編103編3節、130編4節、イザヤ書43章25節、44章22節、ダニエル書9章9節を参照。
- (12) E. Lohmeyer, Das Evangelium des Markus, Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament, 14. Aufl., Göttingen, 1957. (田川、前掲書、132頁による。)

- (13) Lane, W. L., The Gospel according to Mark (The New International Commentary), Grand Rapids, 1974, p. 96.
- (14) Schweizer, E., Das Evangelium nach Markus(NTD), tr. by Madvig, D. H., The Good News According to Mark, Richmond, 1970, p.62.
- (15) Dummelow, J. R., A Commentary on the Holy Bible, New York, 1951.
- (16) Barclay, W., The Gospel of Mark (The Daily Study Bible), Edinburgh, 1954.
- (17) den Heyer, C. J., Marcus I, Kampen, 1985. (伊藤勝啓訳『マルコによる福音書Ⅰ』(コンパクト聖書注解) 教文館、1996年、96頁。)
- (18) 川島貞雄「マルコによる福音書」『新共同訳 新約聖書注解Ⅰ』1991年、177頁。
- (19) Guelich, R. A., Mark 1-8:26 (Word Biblical Commentary), Dallas, 1989, p. 88.
- (20) 黒崎幸吉『注解 新約聖書 マルコ傳』立花書房、1941年、15頁。黒崎はまた『新約聖書略註』、1934年、197頁においても同様の解説をなしている。
- (21) 高柳伊三郎「マルコ」『増訂新版 新約聖書略解』、日本基督教団出版局、1955年、116頁。
- (22) 川島貞雄『マルコによる福音書—十字架への道イエス』(福音書のイエス・キリスト2) 日本基督教団出版局、1996年、86頁。
- (23) 佐藤研訳『マルコによる福音書』(新約聖書Ⅰ) 岩波書店、1995年、9 頁。またこの論理は Guelichの説(注19参照)と同じである。
- (24) Gould, E. P., The Gospel according to St. Mark(The International Critical Commentary), New York, 1913, p. 38.
- (25) Williamson, L., Mark(Interpretation, A Bible Commentary for Teaching and Preaching), Atlanta, 1983.
- (26) Mann, C. S., Mark (The Anchor Bible), New York, 1986, p. 224.
- (27) 大貫隆、前掲書、103頁。
- (28) 1 章22節、27節、2 章10節参照。イエスは病気を癒す権威を持った超人的存在として描かれている。
- (29) Strack, H. L./Billerbeck, P., Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch, I, 624.
- (30) マルコ福音書13章までの群衆がイエスに好意的であるということについては、田川建三『原始キリスト教史の一段面』勁草書房、1968年、第四章を参照。
- (31) 『塩鉄論』「利議」。

e-mail : konishi@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp